

氏 名	ヤマ シタ マ イ 山 下 麻 衣
学 位 の 種 類	博 士 （美 術）
学 位 記 番 号	博 美 第 248 号
学位授与年月日	平成21年 3 月 25日
学位論文等題目	〈作品〉Dogsled, infinity, Lion and Canvas 〈論文〉ユーモアある事実を生み出すということ
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教 授 （美術学部） 坂 口 寛 敏
（論文第1副査）	〃 准教授 （ 〃 ） 布 施 英 利
（作品第1副査）	〃 教 授 （ 〃 ） 渡 辺 好 明
（副査）	〃 准教授 （ 〃 ） 大 西 博

（論文内容の要旨）

私は2000年頃からパフォーマティブな行為によって日常の現実空間に直接アプローチし、私たちが思う「現実」から少しズレた、あるいは、はみ出した「おかしい」事実を起こし、ビデオなどによるドキュメンテーションを作品として発表する制作方法をとってきた。この「おかしい」とは、この時点では変な、ズレた、妙な、といった意味だが、時として本人は直接意識せずとも「可笑しい」つまり「ユーモアある」に変化することがある。本論の「ユーモアある事実」とは、こういった「おかしい／可笑しい事実」を指す。

本論は、私と、私に近い制作手法を言葉にした「ユーモアある事実を生み出すということ」を主軸に、近年増えつつあるユーモアある美術表現について考察する事を目的としている。よって本論は、ユーモアと美術の周りを周回しながら、自身の制作活動と現代美術における様々なユーモアある表現とを同時に視野に入れ、社会でのユーモア、アーティストにとってのユーモアの使用意図・効果、可笑しみの発生方法といった側面から、最終的に「ユーモアある事実を生み出す」表現へと着地してゆくものである。

本論は四章から構成される。第一章では、社会一般におけるユーモアという概念を規定する。フロイトによる、ユーモアは精神的姿勢とする考察を取り上げ、結果である「笑い」との相違を明らかにしつつ、ユーモアを生み出すうえで必要な素地として精神的姿勢である「自己の客体化」および「メタ自我」を導き出す。ユーモアはジョークやお笑いといった形に限ったものではなく、より深い精神性に既に存在すると言える。かつ、ユーモアを生み出すメカニズムにも目を向け、シンプルかつ重要なものとして不適合理論を取り上げる。不適合理論とは、平たく言えば予想していたものと結果との突然の「ズレ」により可笑しみが生じるというズレの理論である。

第二章では、現代美術に「ユーモア」が実際どのように流入したか、その導入期と思えるポール・マッカーシーに特に注目し、外観にユーモアを纏う作家の戦略的意図について言及する。本章で触れる作品群は、絵画、彫刻、パフォーマンスといった従来の美術の形式を保ちつつも、内容が過激な表現である際、その外装にカモフラージュとして「ユーモア」を用いたものである。前章で挙げたユーモア発生のメカニズムと照らし合わせ、サイズのズレなど、フォルムがユーモアを発する具体的な構造を、幾つかの作品例を挙げ考察した。たとえ目的が笑わせることと異なろうと、外面的に可笑しい作品は、従来

の（真面目な）美術から遊離しようとする抵抗的なベクトルを有していることを明らかにする。また、私の初期の絵画作品と、ジオラマ写真シリーズ《complex》（1997－2000）も、このグループに属すると思われる為、現在の手法への推移を含めここに記した。

第三章は、私を含め本論の主題である「ユーモアある事実を生み出す」作家たちに焦点を絞っている。彼らにはもはや外見的なユーモアは存在しない。ユーモアを使うのではなく、ユーモアの中に飛び込み、ユーモアそのもの、あるいはその一部になったと言ってよい。ここでは、畏の彫刻で知られるアンドレアス・スロミンスキーの（畏とは異なる）近年の作品など取り上げ、こういった作家達の精神的側面・共通する美学に言及し、子供の秘密作戦に似た構造を見出す。「かたち」としてのユーモアを生み出す作家が、従来の美術からの遊離を試みるのに対し、「ユーモアある事実」を生み出す作家は、私たちが生きるこの世界あるいは人間社会のルール、すなわち「現実」から、一時、遊離することを試みている。この種のユーモアを可笑しいと感じ、笑う人は、少なからず今生きるこの世界に堅苦しさを感ずき、遊離したい欲求があると予想される。《complex》シリーズ以降の、公園の芝生に走って道を作った《infinity》（2006）をはじめとする、私の現在の制作も「小さな目的・多大な労力」という観点から、ユーモアある事実を生む構造の一つとして述べ、背景にある資本主義的価値観への抵抗感を潜在的思考として導く。

第四章では、再度総括として、フォルムとして／内容としてを問わず、ユーモアを表現に用いるアーティストの隠された真意を探り、作品と鑑賞者の関係が、人間同士のようなパーソナルな体験に推移し、社会におけるユーモアの使用用途と同じ「嫌われたくない」という願望が作家の内に潜んでいる可能性を発見する。また「ユーモアある事実を生み出す」アーティストが、事実を方法として信頼する根拠として、可笑しい、可笑しくない以前の「こと」が持つ「もの」と同等の不変的強度を挙げ、僅かにズレた「事」を生むことが直接現実に変化を与えうるという期待について言及した。

美術におけるユーモアも人間関係におけるジョークと同じく、脇役（テイスト）的存在であるかもしれない。だが同時にユーモアが精神的姿勢であるという解釈を通し、それは必ずしも脇役ではなく、アーティストの中核そのものであると気付く。つまり本論はユーモアという脇役にスポットを当てることで、逆にアーティストの真意を照射しようとする試みである。

#### （博士論文審査結果の要旨）

この論文は「ユーモア」という切り口から、芸術というテーマにアプローチしたものである。

論者も言及しているように、今日テレビのエンターテインメントが隆盛をみせる、「お笑い」は、たいへんパワフルな存在感をもっているが、ここではそのような息抜きや快楽としてのお笑いではなく、美術作品に生きた命を注ぎ込む力ともなる「ユーモア」という視点からの芸術への考察である。

第一章では、ユーモアと笑いの相違、すなわちユーモアには「自己の客体化」や「メタ自我」と関わっていることなどが考察される。つまり論者にとってユーモアとは、深い精神性に関わるものだと論じられる。

第二章では、現代美術の作品を具体例として検証しながら、ユーモアというもののありようをさらに論考していく。また論者の作品なども取り上げながら、ユーモアがどのように造形化、美術化されるかという問題に踏み込んでいく。

第三章では、「ユーモアある事実を生み出す」という本論のタイトルとも関わる視点から、アンドレアス・スロミンスキーや筆者自身の作品「infinity」（2006）などを例に、作家というもののスタンスを明らかにしていく。

第四章では、パーソナルな体験や、社会におけるユーモアなど、さまざまな観点から芸術とユーモアについての論考がまとめられる。

ややもすると真面目な芸術からは敬遠され、あるいは単なるエンターテインメントの味付けとしてしか扱われないこともあるユーモアというものを、論者は、芸術の問題としてユーモアに肉薄し、その価値を明示しようと努力する。論者にとっての芸術表現のテーマは、ユーモアが必ずしも明示されて照準を合わせてはならないが、しかし人の心に届く芸術作品にとっての、ユーモアというものの役割を重視し根底に置き、またそれゆえのこのような論考である。

この論文では、その実践としての作品制作も紹介される。論文が作品を照射し、作品が論文に実在感を与える。その相互関係によって、論文の言葉はますますリアリティをもつ。美術、ユーモア、社会など、論者は芸術とそれを取りまく現代のさまざまな問題にも目を配る。そのような論考によって、芸術というものの新しい側面と、その価値が浮かび上がる。たいへん意義のある論考である。

よって、この論文を審査員全員の一致で合格とする。

#### (作品審査結果の要旨)

博士学位審査展で展示された「Lion & Canvas」「Dogsled」「infinity」の作品は、いずれも申請者の独創的な発想である「ユーモアある事実」として生み出されたものである。「infinity」では公園の芝生上で二人が走り回ることによって次第に∞マークが生じていく様子が映像化され、「Dogsled」では23台連結されたラジコンカーが牽引する轡(そり)に乗ってバッテリーが切れるまで雪上を駆け抜け、「Lion & Canvas」では動物園のライオンの檻に投げ込まれ、ライオンの為すがままにされ荒々しい傷痕の残る3枚のキャンバスが美術館の壁面を飾った。

学位論文「ユーモアある事実を生み出すということ」では、現代美術の潮流においてユーモラスな要素を孕んだ作品、作家が多く取り上げられているが、申請者が学部学生時代以来、展開してきた作品を俯瞰すると、既にそのころから一貫した態度と関心が顕著に現れている。とりわけ博士課程在学中にドイツを中心としたヨーロッパ各地で行なった、行為の結果をドキュメントした表現活動は、作家の主観性を離れた地点で「強固な客観性を備えた表現」が志向されており、特に「infinity」に強く現れている。また「Lion & Canvas」「Dogsled」の様に、映像とオブジェクトを合わせて展示するものにおいては、一見他愛なくも見える行為や出来事の裏側に、日常への注視と長い熟考を経てはじめて可能であるような卓抜な構想と、「修行」とも見えるほどの多大な努力・労苦が隠されていて、彼女の表現活動が、作家と作品、行為と表現、事実と虚構などの重要なテーマを巡ってきわめて自覚的に展開されてきたことが伺える。その結果、最新作「Lion & Canvas」では、キャンバスをライオンに預けることで、デュシャンの「泉」以来たえず問題にされてきた作家の主体性と美術制度との関係が、彼女ならではの軽妙さで見事に顕にされている。

審査会では、これまでの一連の表現活動を踏まえて提出された申請者の作品が、独自の批評性と表現を獲得したものであり、博士の学位を認めるに相応しい優れたものであるという評価で全員一致した。

#### (総合審査結果の要旨)

申請者の創作活動の初期から現時点までの作品を俯瞰してみると、絵画的イリュージョンとの決別を図り、如何にして「リアリティー」を至近距離にまで引き寄せられるかという試みを作品の中で一貫して追求している。

初期の自己の姿(キャラクター化)を風景の中に対象化した絵画、スタジオにセットされた私と環境の撮影写真、実際の野外での設置風景写真、行為を環境の中で相対化して見せる映像とその仕掛けとなるオブジェなど、多様な表現手法を移行させながら、或は組み合わせ、独自の乾きとも言える表現の事実を獲得してきているように見える。この乾いた表現の事実は、申請者がワイマール・バウハウス大

学留学をきっかけにドイツ語圏各都市に滞在し、制作したこの数年に顕著に現れている。

論文タイトル「ユーモアある事実を生み出すということ」は、ユーモアの素地としての「客観視」、「メタ自我からの視点」を創作の構造に取り込む申請者の表現活動から導きだされた、作品を生み出すための呪文の様なフレーズではないのだろうか。作家と作品、行為と表現、事実と虚構などの現代美術の重要なテーマを巡ってユーモアある事実としての作品を検証することで、洋の東西を越えて共通する芸術というものの新しい側面とその価値を、見事に浮かび上がらせている。審査会では、これまでの一連の表現活動を踏まえて提出された申請者の論文と作品が、独自の批評性と熟考された表現を獲得したものであり、博士の学位を認めるに相応しい優れたものであるという評価で全員一致した。「ユーモアある事実を生み出す」運動体としての創造行為に意義を見いだす申請者の今後の展開に大いなる期待を寄せた。